

カンキツのクワミハムシによる被害と防除

従来よりカンキツを食害することは知られていたが、多発することは稀であった。本年、南予を中心に広域に発生が見られ、被害が多発した園地も見られた。春葉の被害は知られていたが、果実も盛んに食害している事例が見られ、多発した場合は大きな被害をもたらすと考えられる。

○生態と被害

成虫の体長は3.5mm程度で、濃い藍色をしている。1回目は4～5月、2回目は6～7月に成虫が発生する。1回目の成虫はカンキツやジャガイモ・クワなど様々な植物の新葉を食害する。2回目の成虫の加害は通常少ないとされるが、本年は7月に盛んに果実を食害する事例が見られた。

新葉では周縁部を不規則や、穴を開けるように食害する。果実では果皮を舐めるように食害し、その部分は黄白色から灰白色になる。

写真1 成虫による葉の食害痕



写真2 成虫と果実の食害直後の状況(左)



写真3 成虫による果実の食害痕(右)



○防除

クワミハムシに対する登録薬剤は無い。過去の試験や本年の試験結果から、有機リン系(スプラサイド乳剤40)やカーバメート系(オリオン水和剤40)、合成ピレスロイド系(テルスターフロアブル)の薬剤の効果が良かった。一方、カンキツでよく用いられるネオニコチノイド系薬剤(モスピラン水溶剤、アドマイヤーフロアブル)の効果は低かった。

これらの結果より、主要薬剤の系統の変遷が、従来問題とならなかったこのような害虫の発生に影響していることも考えられた。

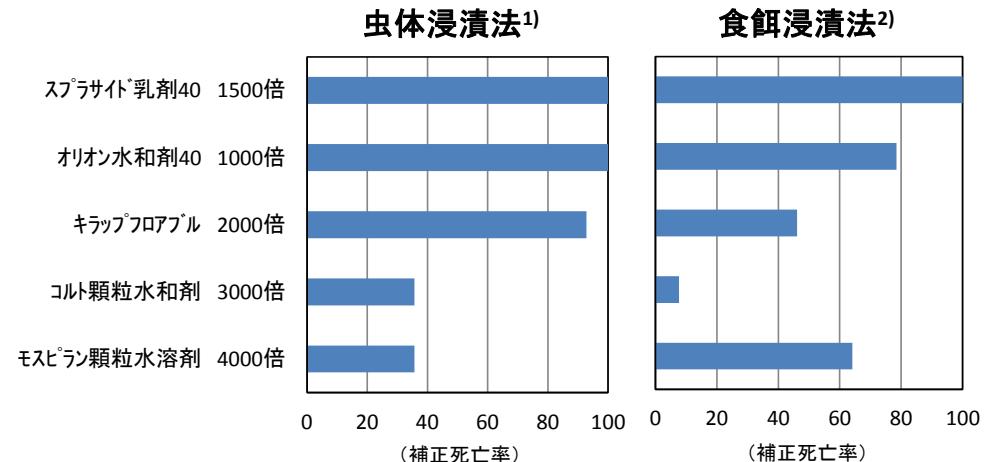


図 クワミハムシ成虫に対する各薬剤の殺虫効果(2014年)